

第1特集

ハイエンド診察

違和感を手繰り寄せる実践知

診察とは、単なる情報収集の手続きではなく、患者の語りと身体の徴候を手がかりに、病いの全体像へと迫っていく創造的な営みである。臨床経験を重ねるにつれ、私たちは問診や身体診察に一定の型を見出し、その精度を高めていく。しかし同時に、熟練した臨床家ほど、その型にとどまることなく、むしろ個々の患者に応じて柔軟に問いを立て直し、わずかな違和感を手繰り寄せながら診断へとたどり着いていくようにも思える。

近年、診断学は検査技術やバイオマーカーの進歩とともに飛躍的な発展を遂げている。その恩恵は計り知れないが、一方で、診察の本質が「検査へと至る前段階」として矮小化される危うさも孕んでいる。本特集でいう「ハイエンド診察」とは、決して高度医療機器に依存した診断技術を指すものではない。むしろ、限られた情報のなかで、患者の言葉の選び方や沈黙、生活背景といった文脈を読み取り、必要な情報を見極め、不要なノイズをそぎ落としながら意思決定に至る、その総合的な臨床能力を指している。

本特集では、各分野で第一線に立つ臨床家が、自らの経験に裏打ちされた「会心の症例」をもとに、思考の過程や診察の工夫を率直に語る。そこには、教科書的知識だけでは到達し得ない、臨床の実践知が凝縮されている。読者がそれらをそれぞれの現場に持ち帰り、自らの診療を見つめ直す契機としていただければ幸いである。診察という営みの奥深さと可能性を、あらためて感じていただければ嬉しく思う。

編集幹事

大阪医科薬科大学医学部
総合診療医学教室

鈴木富雄